

# 教授学習過程の映像化による大学の授業改善の研究

大学教育における教授学習向上を支援するための「授業改善支援システム」の開発  
 1. 授業改善プログラム（映像資料、教授学習法の事例集、自己学習ガイドブック）を全国の大学に提供  
 2. 持続性のある大学間共同研究体制の確立

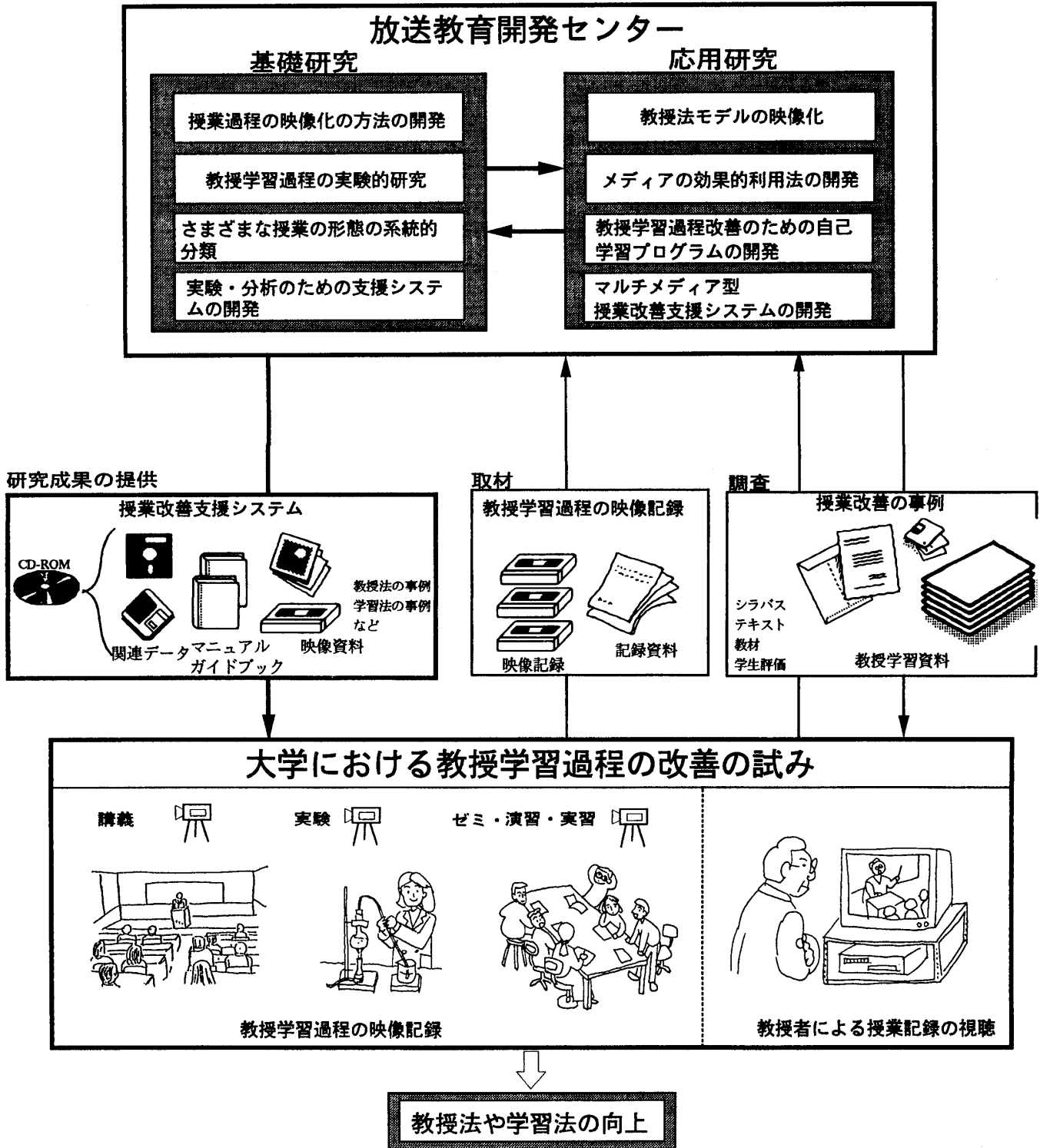


図1 共同研究の概要

## I. 目 的

本研究の目的は、第1に、大学における教授学習過程を映像に記録し、授業改善のための自己学習プログラムを開発すること、第2に、これらの研究成果をもとに教授学習向上のための支援システムを開発し、大学間の共同研究体制を確立することにある。そして、第3に、これらによって大学教育の向上と革新に貢献しようとするものである。

図1は共同研究の概要を示している。

## II. 内容・方法

具体的な研究課題はつぎののべるとおりである。

### (1) 大学における授業の系統的分類

講義、ゼミ、演習、実験、実習などの多様な教授学習過程の形態と機能を分析し、類型化する。

### (2) 映像化による教授学習過程の分析

授業設計、メディア利用、教授行動、学習行動などを映像化して比較分析し、教授法のモデルを提供する。

### (3) 教授学習過程の実験的検討

特徴ある教授法、教材提示法などを抽出し、その学習効果を視聴テスト、反応時間測定などの方法で分析する。

### (4) 実験・分析のための支援システムの開発

教授過程の分析や学習効果測定などの支援環境として、多画像同時提示システム、反応データ記録システムを研究開発する。

### (5) メディアの効果的利用法の開発

教授学習過程における多様なメディアの効果的な利用法を開発する。

### (6) 自己学習プログラムの開発

教授者の自己モデリングや自己評価による教授法の工夫・改善および、学習者の学習活動を支援するための自己学習プログラムを開発する。

### (7) 「授業改善支援システム」の開発

本研究に関する全資料を統合してマルチメディア型の「授業改善支援システム」を開発する。

## III. 研究経過と計画

研究期間は平成5年度—平成7年度までの3年間である。今年度（平成6年度）までの研究経過と平成7年度の計画はつぎのとおりである。

### <平成5年度（初年度）>

- (1) 7大学11科目の授業の事例を収集し、工夫・改善の方法と内容、映像記録法の問題点などを検討した。
- (2) 映像教材における教授法、教材提示法などを比較分析した。
- (3) 多画像同時印刷の制御プログラム、反応データ記録装置のマニュアルを整備した。

- (4) 学生による授業評価の事例を収集した。
- (5) 教授者の授業実施に関する調査項目を作成・試行した。
- (6) 平成6年度以降の研究計画について再検討した。
- (7) 第49回公開研究会で研究成果を発表した。

「映像教材の送り手と受け手の相互関係：9年間の共同研究の総括と展望」（藤田恵璽）

#### <平成6年度（第2年度）>

- (1) 効果的な教授・学習法の研究、授業改善支援システムの研究開発に関して、公募による共同研究を行った。
- (2) 映像教材における教授法と視聴者反応を比較分析し、視聴テスト開発の基礎資料を得た。
- (3) 実験や実践データをもとにメディアの効果的利用法を検討した。
- (4) 放送教育開発センターのオープンハウスにおける公開研究会で研究成果を発表した。

テーマ：大学の授業改善—より良い実践と研究法の確立をめざして—

司 会：山地弘起

発 表：「共同研究の概要と問題提起」（伊藤秀子）

「試験答案から教授方法を学ぶ」（大場 浩）

「創造性啓発のための教授法に関する一試み」（窪田八洲洋）

「インターネットによる教師教育情報提供の現状」（黒田 卓）

「自らの授業を研究対象とする」（村川雅弘）

「ビデオ教材における視聴覚情報提示と学習」（藤田恵璽）

あわせて、出席者を対象として大学の授業改善と公開研究会に関する調査を行った。

- (5) 放送教育開発センターのシンポジウムで研究成果を発表した。
- テーマ：大学改革とメディア
- 発 表：「研究活動とメディア利用」（菅井勝雄）
- (6) 教育工学関連学協会連合第4回全国大会のフォーラムに企画参加するとともに、研究発表を行った。

テーマ：大学における自己評価（コーディネータ・司会：永岡慶三・牟田博光）

（企画参加：藤田恵璽・伊藤秀子）

発 表：「日常研究活動の文脈におけるメディアリテラシーの育成

—メディア利用の立場から—」（菅井勝雄）

「生活科単元開発スキル育成のための講義法—授業研究の立場から—」

（村川雅弘）

- (7) 大学の授業改善に関する報告書（放送教育開発センター研究報告第83号）を作成中である。
- (8) 研究報告書を専門分野の研究者に配布し評価調査を行う予定である。

#### <平成7年度（最終年度・計画）>

- (1) 公募共同研究によって対象分野を拡大する。
- (2) 反応データ記録システムを精練化する。
- (3) 学習者の自己学習を動機づける方法、自己モデリングによる教授法改善プログラムにつ

いて試案を作成する。

- (4) 試案を全国の大学に配布して評価調査を行い、改善のための知見を得る。
- (5) 全資料を「授業改善支援システム」で統合し、共同研究の成果のCD-ROM化を試みる。
- (6) 研究成果をまとめ、研究報告書、研究論文として発表する。

#### IV. 意義・特徴

本研究の意義および特徴はつぎのようにまとめることができる。

- (1) フィールド・スタディ  
ビデオで授業の場面を直接とらえ、教授学習の具体的な工夫・改善の方法を提供する。
- (2) 教授学習過程の実験的研究  
どのような教授法や教材提示法が効果的かを、条件を統制して実験的に検討する。
- (3) 学習過程の中からの教授法改善  
学習過程、効果、学生による授業評価などをふまえて効果的教授法を開発する。
- (4) 自己学習プログラムの開発  
画一的な教授法を提案するのではなく、教授者が自分自身をモデルとして授業を改善する方法を支援する。学習者に対しては、興味・関心などに応じた学習活動を支援する。
- (5) メディアの効果的な利用法の開発  
大学の授業におけるさまざまなメディアの効果的な利用法を開発する。
- (6) システム化による大学間ネットワークの確立  
「授業改善支援システム」開発して利用者間の情報交換を行い、持続性のある大学間ネットワークを確立する。
- (7) 授業改善に関する科学研究の方法論の確立  
これまで、教授者の実践の中でのみ行われてきた大学の授業改善を、科学研究の対象とする方法論を確立する。